

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	加藤 裕美
論文題目	マレーシア・サラワクにおける狩猟採集民社会の変化と持続—シハン人の事例研究—		
（論文内容の要旨） 本論文は、マレーシア・サラワク州の狩猟採集民、シハン人が営む生活の変化と持続に関する研究であり、著者は、2007 年 12 月から 2009 年 2 月までの 15 ヶ月間におこなったフィールド調査と文献調査から得られたデータにもとづいて論述を展開している。 序章では、サラワク州の狩猟採集民に関する文化人類学的研究と、彼らを国家が主導する開発の犠牲者として位置づける研究の双方を検討することで、本論文の問題設定をおこなっている。前者については、数十年前に定住化を開始し、ロングハウスを生活の根拠地とするようになっていくこと等の様々な現代的变化に大きな関心を向けてこなかった傾向を批判している。後者については、狩猟採集民を開発によって困窮し、消滅の危機にさらされているマイノリティと見なす点で、彼らの生活現状を適切に記述し得ていないことを著者は指摘する。こうした研究の現状をふまえ、著者は、歴史的視点からシハン人が営む生活の変化と持続の諸相を具体的な資料にもとづいて描き出すことの意義を明らかにしている。 第 1 章では、シハン人の生活に大きな影響をおよぼしてきたサラワクにおける森林開発の歴史を、19 世紀半ばに始まるブルック王国期、太平洋戦争後のイギリス直轄植民地期、独立後の経済成長開始期(1960 年代～1970 年代)、およびそれに続く時期(1980 年代～2000 年代)に区分し、それぞれの時期における森林をふくむ土地に関わる開発政策とその実施内容、およびその政治経済的背景を明らかにしている。特に詳述されているのは、イギリス直轄植民地期に制定された土地に関わる諸権利を規定している「1958 年土地法」と、それにもとづいて実施されてきた大規模な商業伐採とそれに対する国内外からの批判、および、その後のアブラヤシ・プランテーションが拡大していく過程である。 第 2 章では、1960 年代以前のバルイ河南方の森を中心に遊動生活をおくっていた時期のシハン人の生活について、生業、社会関係、およびそれらが営まれていた生活圏に焦点をあてた記述が展開される。そこからは、シハン人が生活圏内外の諸状況に反応し、頻繁な移動を繰り返しながら、狩猟採集の対象を選択していたことや、狩猟採集物の分配を活発におこなっていたことなど、現在のシハン人にも通じる多くの事象が明らかにされる。 第 3 章では、狩猟採集民の定住化政策とその背景、および 1960 年代以降のロングハウス建築後の生業、社会関係、生活圏についてのべている。章の前半部では、ロングハウスの建築後も、半定住の状態が長期にわたって続き、その間、シハン人は、狩猟			

採集とその収穫物の取引を、陸稲や商品作物の栽培と並行しておこなっていた状況が記述される。そして、後半部では、1980年代半ばにロングハウス近隣の森で開始された商業伐採が生業に大きな影響をおよぼすようになったことや、伐採に強硬に反対することなく、補償金を受け取る方向で、シハン人が現状に適応をはかっていったことなどがのべられる。

第4章では、シハン人がロングハウスとその周辺の森から、伐採道路沿いや行政地区の中心地であるブラガ町に生活圏を拡大していった状況と、そのなかでどのような生業や社会関係が営まれてきたかが詳細に記述される。そこから明らかにされるのは、ロングハウス、ブラガ町、伐採道路沿いという分裂してしまったかに見える生活圏の中で、頻繁な移動を繰り返し、状況に応じて生業活動を素早く変更し、分配行動をむしろ活発化させながら生きているシハン人の姿である。

終章では、第1～4章における記述と分析を要約するとともに、序章で検討した先行研究に立ち返って、本論文の学術的意義についてのべている。すなわち、狭隘化する森にしがみついて困窮するのも、農耕民や都市民になって消滅してしまうのでもない、狩猟採集民の現代的な姿を実証的に描き出す研究は可能であり、今後このような方向でマレーシアやひいては東南アジアにおける狩猟採集民研究は進められるべきであることを著者は力説している。

(論文審査の結果の要旨)

マレーシア・サラワク州の狩猟採集民に関する研究の多くは、かつておこなわれていた森での遊動生活に関心を向けがちな文化人類学的な研究にせよ、商業伐採等の開発によって生業と生活の場を失った開発の犠牲者として狩猟採集民を位置づける研究にせよ、大きく変化する自然環境と社会状況に巧みに適応して生きる狩猟採集民の姿を視野の中心においてはこなかった。本論文は、サラワク州の狩猟採集民、シハン人の生活を歴史的視点から実証的に描き出すことを通して、上記のような先行研究の問題点を乗り越えようとする試みである。

本論文は以下の諸点において学術的に高く評価できる。

その第1点は、これまでわずかな報告しかなかったシハン人を研究の対象としたことである。それゆえ、本論文で提示される、とりわけ著者自身のフィールド調査から得られたデータは貴重である。本論文では、こうしたデータを文献資料と組み合わせることで、19世紀半ば以降のシハン人の生活を、生業、社会関係、それらが営まれる生活圏に焦点をあて、その変化と持続を歴史的な観点から詳細に記述し、分析している。

第2点は、多数の地名に言及しながら語られる頻繁な移動をめぐる口承史を、その経路を示す地図を作製することで、明快に叙述したことである。これは、近年のオーストロネシア語族の比較研究において注目されてきた、祖先名の連鎖からなる系譜(genealogy)とは異なる、地名への言及からなる系譜(topogeny)の具体例として重要である。

第3点は、文献資料と口承史を丹念に織り合わせることで、遊動生活からロングハウスを生活の本拠地とする状態への移行を詳細にのべていることである。サラワク州に居住する狩猟採集民の定住化については多くの報告があるが、そのほとんどが定住化の要因と定住年に関心を向けているのに対し、シハン人がロングハウスの建築後も様々な理由と原因により、長期にわたって狩猟採集と農耕をともに営む半定住の生活を続けていたことを明らかにしている点で、本論文の功績は極めて大きい。

第4点は、シハン人の生活に関心を限定するのではなく、州政府による各種の開発政策の実施と商業伐採やアブラヤシ・プランテーションの拡大が、サラワク州、とりわけシハン人の生活するブラガ地区における自然環境を大きく変化させていった過程を具体的かつ精細に記述していることである。そのことによって、本論文は、こうした変化を背景にシハン人が町や伐採道路沿いに進出し、彼らの生活が変化していく過程を立体的に描き出すことに成功している。

第5点は、シハン人が狩猟採集生活を通じて培った規範、価値観、社会関係の基本的様式を継承しながら、ロングハウスを根拠地とする生活を拡大、再編してきた過程を見事に描き出していることである。国家が推進する開発に対して地域住民が抵抗でも受容でもない、柔軟な対応をとっているという論点に目新しさはないが、本論文の学術的価値を大きく高めているのは、この論点を、生業、社会関係、生活圏などの記

述を通して詳細かつ具体的に論じていることである。なかでも特に鮮明な印象を与えるのは、ロングハウスから賃労働のためにブラガ地区の中心地であるブラガ町に転居したり、イノシシ猟のために伐採道路沿いに進出することが、遊動時代にキャンプを設営し、交易品を狩猟採集していたのと同じ言葉で表現されることである。つまり、ロングハウスと町や伐採道路沿いの「キャンプ」は、遊動時代のベースキャンプと短期キャンプに相当するものなのである。こうした記述には、狭隘化する森にしがみついて困窮するのでも、農耕民や都市民になってしまうのでもない、狩猟採集民の現代的な姿が生き生きと描き出されている。

以上の諸点から、本論文は、地域の生態、社会、歴史の総合的理解を基礎にした地域研究の発展をめざす本研究科の研究成果としてふさわしい内容を備えた優れた論文であると判断できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 23 年 10 月 7 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。